シリーズ　しまねの遺跡 発掘調査パンフレット3

西川津遺跡

にしかわついせき

松江市

山陰最大級の弥生拠点集落

2014年3月
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

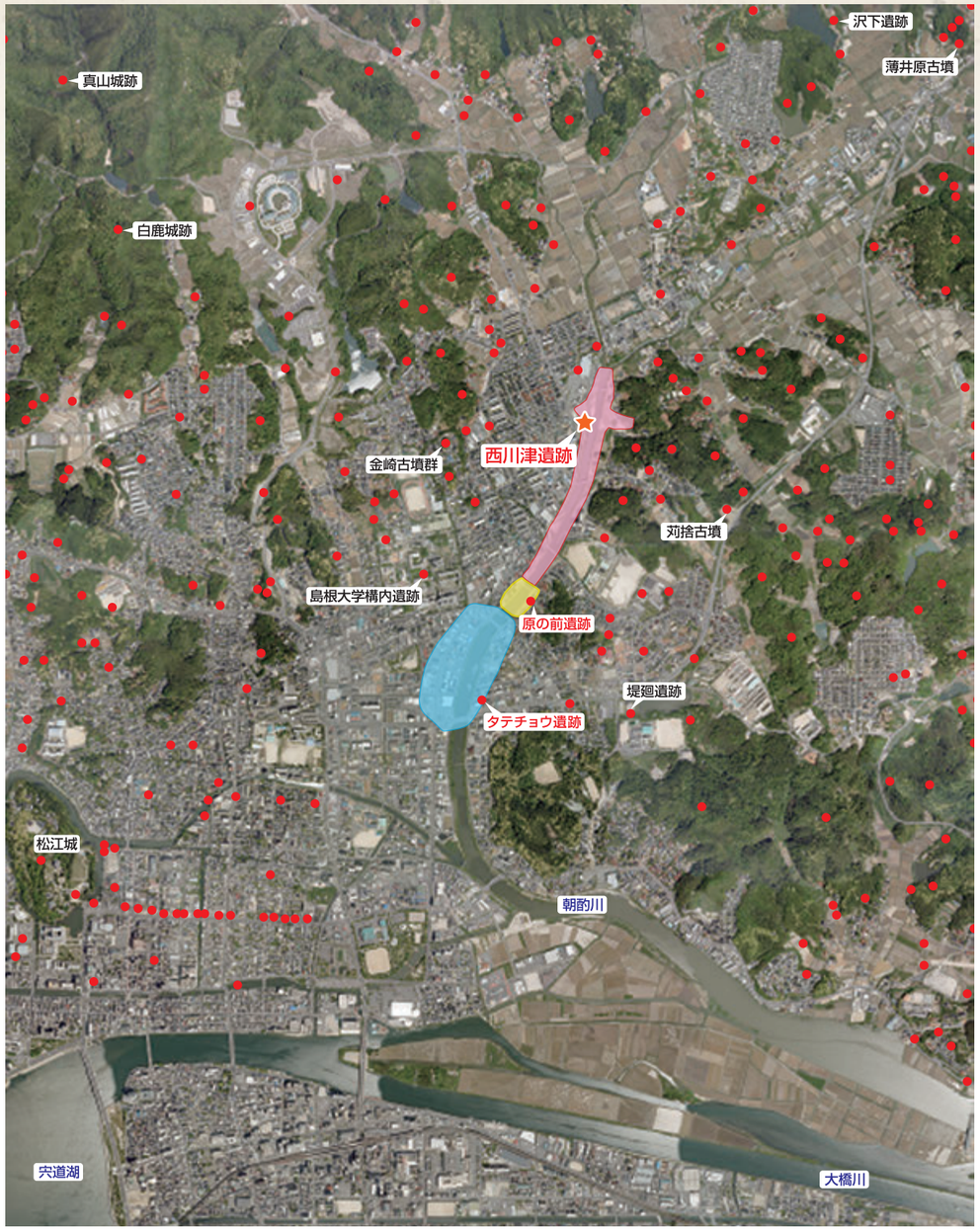
はじめに

松江市西川津町に所在する西川津遺跡は、朝酌川の河川堆積によって形成された松江平野の北部に位置し、縄文時代から現代に至るまでの長期間に渡る人々の生活を窺うことができる遺跡です。

遺跡が所在する朝酌川流域には、原の前遺跡、タテチョウ遺跡といった大規模な遺跡が広がり、3つの遺跡を合わせて「朝酌川遺跡群」と呼称しています。この遺跡群は1974年以降河川改修や道路改良の工事に伴う調査が行われています。

発掘調査では、低湿地に立地する環境から普段は残らない木製品等の有機質の遺物が良好な状態で発見される等、人々の暮らしに関わるあらゆる種類のものが残されていることが分かりました。さらに多くの自然遺物が残されていたことや、河川や湖に堆積した土砂等の検討から当時の自然環境を復元することができました。

このように、西川津遺跡は自然環境の変遷とそこに暮らした人々の様子を具体的に明らかにすることができる県内でも数少ない遺跡です。



西川津遺跡の位置と周辺の遺跡（●は遺跡や古墳等の位置を示す。空中写真は2009年撮影。）

西川津遺跡と松江平野の変遷

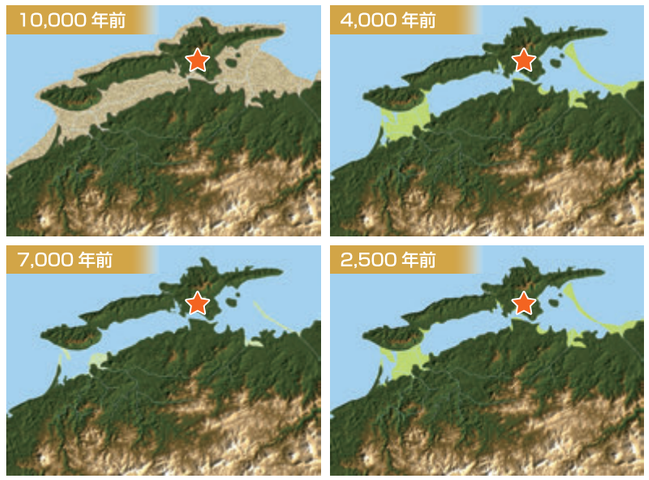
西川津遺跡が位置する朝酌川周辺の古環境は、時代によって大きく変わっていることが発掘調査によって具体的に判明しています。

今から1万年前（縄文時代早期）は、現代の地形とは大きく異なり、朝酌川が谷を形成しながら宍道湖から出雲平野の方へ流れていました。その後、今から7千年前（縄文時代早期末～前期初頭）は、今よりも温暖な気候で、海水面が急速に上昇する「縄文海進」の時代にあたります。海が遺跡の周辺の山裾まで広がり、「古宍道湖」と呼ばれる内湾ができます。この内湾の汀線がちょうど遺跡の北端あたりになると考えられます。また内湾の底に堆積した泥層には約7,300年前に降灰した鬼海アカホヤ火山灰の堆積が確認されています。

海水面の上昇がピークを過ぎ、下降するようになると、川が運んだ土砂が内湾を埋め立て、平野が形成されていきます。この河川堆積によって形成された微高地に、弥生時代以降になると人々は集落を営み、周辺の湿地を水田として利用していくことになります。

内湾の時代に堆積した泥層（下部の縞状の層にアカホヤ火山灰を含む）
鬼海アカホヤ火山灰：鹿児島県の鬼海カルデラの大噴火による火山灰

島根半島部の地形変遷（中村唯史氏作成）



西川津遺跡周辺の環境変遷（中村唯史氏作成）

今から１万年前（縄文時代早期）

今から 7000 年前（縄文時代早期末～前期初頭）

今から 2500 年前（弥生時代前期）

今から 1200 年前（奈良時代）

現代

★は西川津遺跡の位置を示す。

西川津遺跡の発掘調査の歴史

西川津遺跡の発見は古く、1939年の水田の排水工事で土器が見つかったことから始まり、戦後の電柱埋設工事や1967年の電話線埋設工事に伴って土器などが発見され注目されることとなりました。

遺跡の発掘調査は1979年以降2011年まで河川改修や道路改良に伴って行われ、重要な発見が相次ぎました。1980年代の海崎地区の調査では、縄文時代～弥生時代の遺物が多数出土し、なかでも弥生時代の木器、玉類、石器の製作に関わる遺物・遺構が確認される等、山陰を代表する拠点集落が存在することが判明しました。

その後の調査によって、人面付土器、銅鐸といった重要遺物も出土しましたが、集落本体の場所がどこにあるのかは不明でした。そして2006年以降の道路改良に伴う調査が行われる中で、鶴場地区の調査によって、弥生時代前期と後期の環壕の可能性がある大溝が発見され、初めて集落本体の一部が確認されることとなりました。

1985 年の調査風景（海崎地区）

1998 年出土の人面付土器

1999 年の調査風景（V区）

2008 年の調査風景（B2 区）

調査年度	調査遺跡	調査地点	主な遺構・遺物	報告書（刊行年）
1974	タテチョウ遺跡			
1977	タテチョウ遺跡	橋本竪町	磨製石剣、石舌、土馬、土笛	タテチョウ遺跡Ⅰ（1979年3月）
1978	タテチョウ遺跡	橋本竪町		タテチョウ遺跡Ⅰ（1979年3月）
1979	西川津遺跡			試掘確認調査
1980	西川津遺跡	宮尾坪内558（Ⅲ区）	鳥形木製品、漆塗土器	西川津遺跡Ⅰ（1980年3月）
1981	西川津遺跡	宮尾坪内588（Ⅲ区）	狭鍬、又鍬、斧柄	西川津遺跡Ⅱ（1982年3月）
1983	西川津遺跡	609-20外（海崎地区）	貝塚、貯木場、骨角器、木製品	西川津遺跡Ⅲ（1987年3月）
1984	タテチョウ遺跡	1361-1	布目瓦、建築部材	タテチョウ遺跡（1985年3月）
1984	タテチョウ遺跡	橋本竪町	弥生土器、木製品	タテチョウ遺跡Ⅱ（1987年3月）
1984	西川津遺跡	大内谷海崎（海崎地区）	鳥形木製品、玉類	西川津遺跡Ⅳ（1988年3月）
1985	タテチョウ遺跡	橋本竪町1363-1	狭鍬、又鍬	タテチョウ遺跡Ⅱ（1987年3月）
1985	西川津遺跡	大内谷海崎（海崎地区）	貝塚、貯木場、鉄斧、斎串	西川津遺跡Ⅴ（1989年3月）
1987	タテチョウ遺跡	橋本竪町1358-3	斎串、塔婆、綾編笠	タテチョウ遺跡Ⅲ（1990年3月）
1988	タテチョウ遺跡	橋本竪町1125-3	木製高坏、斎串、土笛	タテチョウ遺跡Ⅲ（1990年3月）
1990	タテチョウ遺跡	1261	外来系土器	タテチョウ遺跡Ⅳ（1992年3月）
1990	タテチョウ遺跡	1262	弥生土器	タテチョウ遺跡（1992年3月）
1991	タテチョウ遺跡	1127	外来系土器	タテチョウ遺跡Ⅳ（1992年3月）
1992	原の前遺跡	1164-9	橋脚、人形代、噴砂、4世紀の護岸跡	原の前遺跡（1995年3月）
1993	原の前遺跡	1164-9		原の前遺跡（1995年3月）
1994	西川津遺跡	647-1（Ⅱ区・Ⅲ区）	土笛、鏝（こて）、柱状卒塔婆	西川津遺跡Ⅶ（2000年3月）
1995	西川津遺跡	1165（Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区）	橇（そり）、杵	西川津遺跡Ⅶ（2000年3月）
1996	西川津遺跡	1170-1・563-1（Ⅱ区・Ⅲ区）	杭、弥生土器	西川津遺跡Ⅵ（1999年3月）
1997	西川津遺跡	595-2・563-1（Ⅴ区・Ⅲ区）	銅鐸、弥生後期の護岸跡？	西川津遺跡Ⅵ（1999年3月）
1998	西川津遺跡	600（Ⅴ区）	人面付土器、貝塚	西川津遺跡Ⅷ（2001年3月）
1999	西川津遺跡	600（Ⅴ区）	灰釉陶器、5世紀の護岸跡	西川津遺跡Ⅷ（2001年3月）
2001	西川津遺跡	560・609（Ⅲ区・Ⅳ区）	杭列、弥生土器	西川津遺跡Ⅸ（2003年3月）
2006	西川津遺跡	海崎596-7・597-6・-7・-8・598-1・599-4、鶴場628-1（C区）	杭列？、縄文土器、弥生土器	西川津遺跡C区・古屋敷Ⅱ遺跡（2011年3月）
2007	西川津遺跡	（C区）	縄文早期の溝、石組遺構	苅捨古墳・西川津遺跡（2011年3月）
2008	西川津遺跡	（D区・B2区）	銅鐸片、弥生前期の貝層、ト骨	苅捨古墳・西川津遺跡（2011年3月）
2009	西川津遺跡	鶴場627-2,-9,-10（A1区）	弥生の大溝、土笛、ガラス勾玉	西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡（2013年3月）
2010	西川津遺跡	鶴場628-1（B1区）	弥生前期の溝、絵画土器	西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡（2013年3月）
2011	西川津遺跡	鶴場624-13,-14,-16（A2区）	弥生前期の溝、木器未製品、漆	西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡（2013年3月）

縄文時代の西川津遺跡

西川津遺跡では今から約1万年前頃の縄文時代早期の人々の生活の痕跡が確認されています。海崎地区（C区）では、縄文海進による海水準がピークを迎える前の谷地形が確認され、そこからは押型文が施された縄文土器、石器、木製品等が発見されました。

その後の約7千年前頃にピークを向かえる海水面の急速な上昇によって遺跡の大部分は水没し内湾となり、上流側の海崎地区付近が汀線付近になりました。この汀線付近では土坑や多くの土器が確認されており、内湾周辺での人々の暮らしの様子が具体的に分かります。当時はシカやイノシシを狩り、食料としてだけではなく角や骨も加工して様々な骨角器が作られました。

約5千年前頃はその前後と比べて出土遺物が減少しており、遺跡周辺は人々の生活の場では無かった可能性があります。その後の海水面が下降していく後期～晩期にかけては、河川堆積の影響を強く受ける場所になり、朝酌川の河口はより南側の下流に移動していくこととなります。この河川堆積によって形成された微高地や低湿地が、その後の弥生時代の人々の生活拠点として積極的に利用されていくことになります。

最初に生活を始めた人々の道具　～早期の土器と石器（海崎地区C区出土）

縄文海進時（前期）の人々の道具（海崎地区出土）

古代出雲歴史博物館提供

縄文時代前期の骨角器と獣骨類（シカとイノシシ）（海崎地区）

海崎地区の縄文時代前期の層からは、土器や石器と共に捕獲され食料とされたシカやイノシシといった動物の獣骨類や、それらを加工して作った小形の骨角器（刺突具や装身具）が多く発見されています。

縄文海進時（前期）の汀線付近に掘られた土坑（海崎地区）

縄文時代の川岸に打たれた杭列（宮尾・坪内地区：Ⅱ区）

縄文時代の川岸付近に打ち込まれた杭列は、漁撈に関わる何らかの簡易な施設であった可能性が考えられます。

弥生時代の西川津遺跡

縄文時代後期から晩期にかけての河川堆積によって形成された微高地に、弥生時代になると積極的に人々が進出し、大規模で拠点的な集落が出現しました。

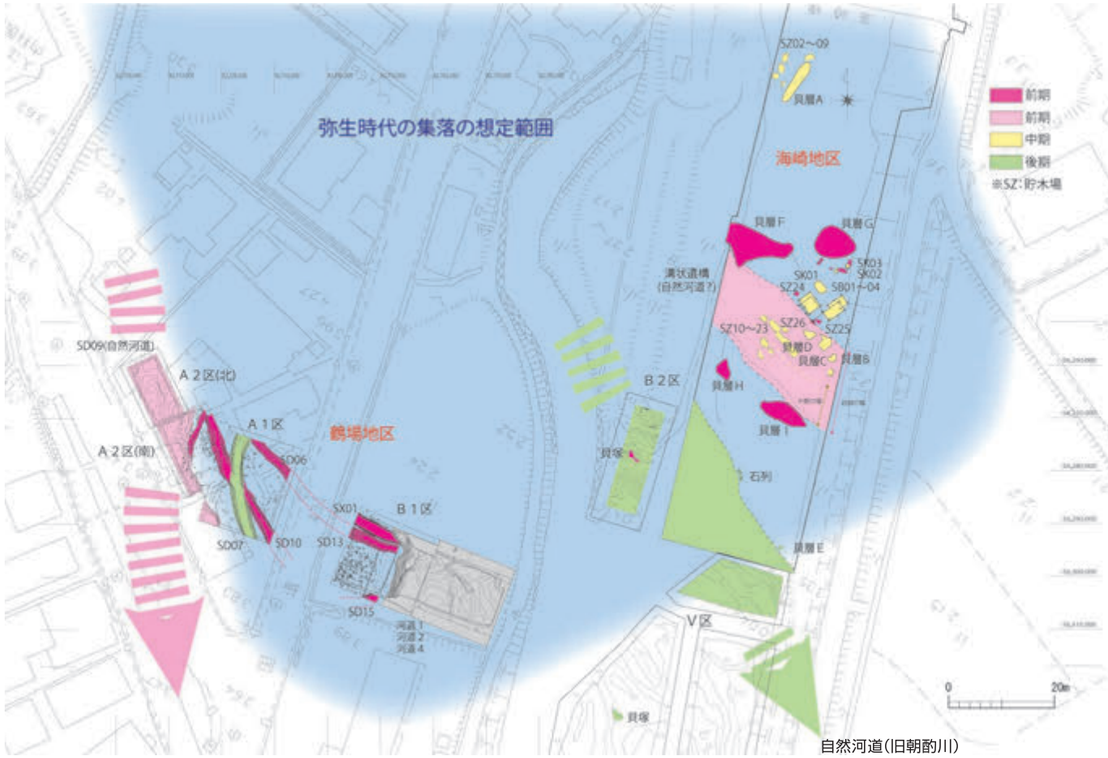
弥生時代の集落の居住域は上流部の鶴場地区や海崎地区等に想定されます。正確な規模は不明ですが、両地区の上流部に存在している微高地に東西0.2km×南北0.4km程の範囲に広がるものと想像されます。

ここに暮らした人々が営んだ水田の跡や墓の跡は未だ不明ですが、居住域の周辺部に存在している可能性が高いと思われます。

解明されはじめた西川津遺跡の集落

2009年鶴場地区で、は弥生時代前期と後期の環壕の可能性のある大溝が発見されました。この発見によって長年分からなかった集落居住域の場所がどこになるのか、ついに手がかりを得ることができました。大溝は、前期のものが少なくとも3条、後期のものが1条存在し、規模は幅2～3m前後、深さ1m前後と大規模なものです。

発見された前期の大溝（SD06・SD10）と後期の大溝（SD07）
（鶴場地区A1区北側から撮影）



発見された前期の自然河道（SD09）の位置から、このあたりが前期の集落の西端になると考えられます。後期には、東側に自然河道（旧朝酌川）がありますので、そこが東端にあたる可能性があります。弥生時代の集落の中心は、鶴場・海崎両地区の北側（上流側）の微高地に広がっていると想像されます。

弥生時代前期の西川津遺跡

弥生時代前期の人々の暮らしは、主に海崎地区や鶴場地区の調査成果から、窺うことができます。

前期の前半には二重の大溝（SD10とSX01）が掘られ、後半には1重の大溝（SD06・SD13）が掘られていたことが鶴場地区の調査で明らかとなっています。これらの大溝は、調査区の西端で確認された自然河道（SD09）に併行するように掘られています。また海崎地区では、木製品の製作に関わる貯木場が3基、貝塚（貝層）が4カ所発見されています。

前期の自然河道（SD09）と大溝（SD10）
（鶴場地区A2区）

自然河道（SD09）で
発見された杭列
（鶴場地区A2区）

大溝(SD10)に廃棄された土器（鶴場地区A1区）

大溝の底からは、当時の人々が使用した大量の土器が発見されています。

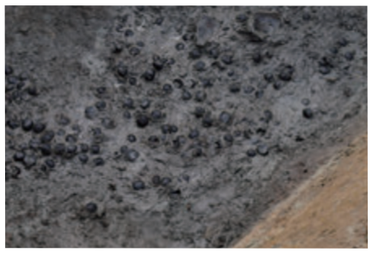
貯木場（SZ025・026）（海崎地区）

杭を円形や方形に打ち込み囲いを作っています。この中に木材や木製品を入れ、水漬けにしていたと考えられます。

食生活

海崎地区で発見された貝塚の中からは、イノシシ、シカといった獣骨やクロダイ、スズキ、サメといった魚骨、ヤマトシジミを中心とする貝類が多数出土しています。これらのほとんどは食糧として利用されたものです。また、鶴場地区からは大量の炭化米やトチノミが発見されています。

当時の人々が米作りをする一方で、自然界にあるものを食料として上手く獲得して生活していることが明らかとなっています。



大溝の底で集中して発見されたトチノミ（SD10）
（鶴場地区A1区）

大溝（SD10）出土のトチノミ

大溝から発見された炭化米
（鶴場地区B1：SX01）

出土遺物

西川津遺跡は低湿地に存在する環境によって、土器や石器のほかに、木器、骨角器、貝輪など様々な材質のものが良好に残っていました。特に前期の出土遺物は膨大な量であり、当時の人々の様子を詳しく知ることができます。

大溝（SD1）出土の弥生土器
（鶴場地区：A1・A2）

土笛：宮尾・坪内地区（Ⅱ・Ⅲ区）出土
九州から山陰にかけての日本海沿岸を中心に出土する特徴的な遺物です。全国で100点余り出土し、西川津遺跡を含めた朝酌川遺跡群からはその半数以上が発見されています。稲作と共に持ち込まれたものと思われます。

貝輪（海崎地区出土）
南海産のアツソデ貝から作られた腕輪です。西川津遺跡で暮らした人々の非常に幅広い交流を窺うことができます。

手前が出土品、奥は復元品

ヒョウタン製容器（海崎地区出土）
ヒョウタン製容器は海崎地区から2個発見されています。いずれも文様を焼きごてによって描いており、非常に珍しいものです。写真左のものは幾何学的な文様を組み合わせて描かれています。

ヒョウタン容器の出土状況

稲作開始期の石器群(海崎地区出土)
縄文時代には見られなかった磨製の石斧や石包丁が見られるようになります。
※中期の可能性があるものを一部含む

前期の骨角器(海崎地区出土)
鹿角やイノシシの牙から作った釣り針、鹿角や鯨骨からできたアワビオコシが見つかっています。先の尖った道具は鹿角やエイの棘尾を利用しています。また右の写真になるような小型品も見られ、矢筈といった弓の部品、魚骨のピアス、牙玉、かんざしといったも装飾品も出土しています。

生産

弥生時代前期の集落では、木製品（鍬や斧柄など）や石器（石斧や石包丁など）といった農工具をはじめ、漆製品、骨角器、玉類（管玉などの装身具）のように様々な材質の道具を生産していたことが分かっています。またこれらの生産に伴う未製品などの出土品が膨大な量であることから、西川津遺跡の集落の中で使うものだけではなく、周辺のムラにも供給されていると考えられます。西川津遺跡の集落は生産と流通の拠点であったといえます。

斧柄とその未製品（鶴場・海崎地区出土）
斧柄には石斧をセットする孔があいた直柄のものと膝柄のものがみられます。斧柄の多くは堅いアカガシから製作しています。
※左手前の斧柄と石斧は復元品

鍬と泥よけの未製品（鶴場地区出土）
鍬は柄を差し込む部分が舟形に隆起しているものが多く、泥よけを固定するための段が設けられています。鍬は堅いアカガシから製作し、泥除けはニガキ、ムクロジといった種類の木を利用していることが分かっています。

壺形容器の未製品
（鶴場地区出土）
クスノキの瘤を上手く利用して作っています。胴部にはまだ樹皮が残っています。このような壺形の容器は全国的にも非常に珍しいものです。頸部には取手が付けられていたものと思われます。

管玉とその未製品・原石(海崎地区出土)
山陰でもいち早く弥生時代の玉作りがが行われていました。軟らかい岩石を原料にして薄い板を作り、それに溝を施してから切り取って、管玉の素材になる棒状の石材にしていました。
※写真は前期～中期の玉作関連出土品

漆製品と漆液容器・ウルシ材（鶴場・海崎地区出土）
遺跡では、赤漆を塗った櫛等の装飾品が多く出土しています。これらは、漆液を入れた小形壷や掻き傷のあるウルシ材の出土によって、遺跡内で製作された可能性が高いと考えられます。漆液容器内の漆の^{14}C年代測定結果は較正年代でBC520～390年（95.4%）です。

掻き傷のあるウルシ材
（鶴場地区出土）
ウルシ材には漆液を採取した掻き傷と思われる浅い溝が見られます。弥生時代のものでは最古級の事例になります。^{14}C年代測定では較正年代でBC550～400年（81.6%）という年代結果が得られています。（※6倍に拡大）

弥生時代中期の西川津遺跡

前期の大溝が確認された鶴場地区では弥生時代中期の出土土器等は少なく、明確な遺構は確認されていません。おそらくこの地区周辺は中期になると水田等で利用されるようになった可能性が考えられます。その一方で、海崎地区では23基の貯木場や貝塚(貝層)が見られるなど、前期から引き続き木製品などの生産拠点として機能していたと考えられます。さらに前期には確認されていない４棟の掘立柱建物が発見されており注目されます。

掘立柱建物SB01 ～ 03（海崎地区）

柱穴の底には板材等が礎盤として充填されていました。建物は木製品製作に関わる施設の可能性があります。写真手前の建物（SB03）の規模は1.82×3.31mです。

貯木場SZ017（海崎地区）

貯木場の多くは1m前後の小規模なものですが、SX017は大形で2.5×1.5mの規模です。貯木場の中や周辺からは木製品の未製品や板材が大量に発見されています。

土坑SK01（海崎地区）

長さ2.7×幅1.5m、深さ0.7mの規模で、底に堆積した層からは多量のヒョウタン種子が発見されており、覆屋のあるヒョウタンの貯蓄施設の可能性があります。

中期の弥生土器（海崎地区・Ⅲ区・Ⅴ区出土）

中期になるとクシ描による装飾を施す壷などが見られ、器種も豊富になります。

弥生土器の出土状況（鶴場地区A2区SD09）

生産と祭祀

前期に引き続き木製品、石器等の道具や漆製品、骨角器、玉類等の生産拠点であったと考えられます。その中で、黒漆でコーティングした漆塗土器がこの時期から見られるようになり注目されます。

この時期の祭祀に関わる遺物には銅鐸や分銅形土製品等があります。銅鐸は集落の農耕祭祀に使用されたものと言われており、集落から一般的に出土しない特殊なものです。この銅鐸の出土からも西川津遺跡の集落が有力な集落であったことを物語っています。

漆塗土器と櫛（海崎地区出土）

黒漆によってコーティングされた弥生土器は西川津遺跡をはじめ松江市内の遺跡から全国の半数以上が発見されています。

赤漆櫛の出土状況
（鶴場地区A2区SD09）

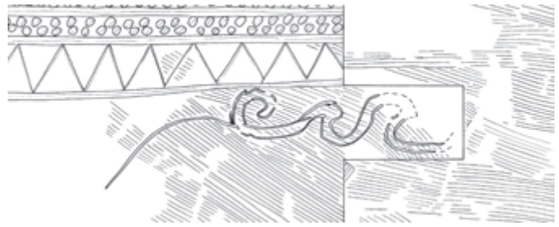
旧河道（SD09）の堆積層から赤漆塗櫛が発見されています。このような竹製の櫛歯を糸で綴じた規格的な方形の櫛は西川津遺跡やタテチョウ遺跡で出土してます。

分銅形土製品（海崎・鶴場地区・Ⅵ区出土）

遺跡の上流域に集中して9点の分銅形土製品が出土しています。祭祀に使用されたものと考えられています。

流水紋銅鐸と銅鐸片（Ⅴ区B2区出土）

弥生時代後期の河道の堆積層から銅鐸が出土しています。その後同一の銅鐸の可能性がある小片が出土しています。この小片も後期の河道から出土しています。出雲では銅鐸が埋納されている事例が多い中で、このような出土状況は注目されます。



絵画土器（鶴場地区B1区出土）

自然河道(旧朝酌川)の堆積層から発見された土器片です。中期後葉～後期前葉頃の壷の胴部であり、細い線で刻まれた絵画が描かれています。絵画は「S」字条のものを２～３つ連続して描いており、ヘビや龍を表現している可能性が考えられます。

弥生時代後期の西川津遺跡

弥生時代後期には、鶴場地区で環濠と思われる大溝（SD07）が確認されています。大溝は前期のものとは方向が異なり、ほぼ南北方向に近いものです。おそらく海崎地区及びその周辺の調査区で確認されている自然河道（旧朝酌川）を意識し平行するように掘られた可能性が考えられます。後期の大溝からは、大量の土器とともに木製品、漆製品（漆塗り蓋）、ガラス勾玉等が発見されています。

後期の大溝から出土した土器（鶴場地区A1区SD07出土）

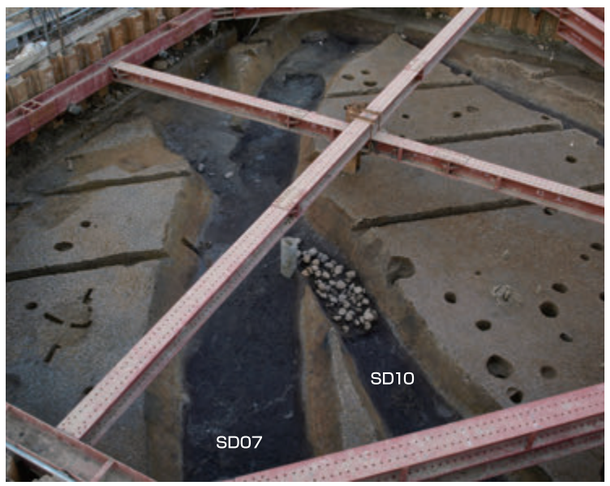
大量に出土した土器には、壷、甕、器台、高坏、低脚坏などが見られ、在地の土器以外に西部瀬戸内地方や近畿地方の影響を受けた土器も含まれています。土器の時期は後期前葉と後期末の二つの時期に大きく分かれています。

後期の大溝から出土した木器（鶴場地区A1区SD07出土）

大溝からは、組合せ式の槽、鋤、四脚付台、鍬、漆塗蓋などが出土しています。このうち槽は大形のスギ板でできており、年輪年代測定の結果、最外周の年代は紀元前71年の結果が得られています。

出土したガラス勾玉（鶴場地区SD07出土）

形状が全国的にも類例がない「Ｊ」字形のガラス勾玉が出土しています。一見縄文時代の石製勾玉に見られる形状の一種に類似しています。



後期の大溝(鶴場地区A1区SD07)

前期の溝（SD10）と交差するように掘られています。幅が3.1mあり、深さは1mほどです。出土した土器の時期から、後期のはじめ頃に掘られ、後期の終わり頃には埋没していると考えられます。

大溝からの遺物出土状況(鶴場地区A1区SD07)

木製の槽をはじめとする木製品は、溝の底に堆積した粘土層から発見されています。

西川津遺跡の弥生集落

西川津遺跡の弥生集落の特徴は次のようになります。

①集落は大規模なもので、環壕を伴っている可能性が高く、弥生時代前期から後期までの約800年間もの長期間にわたって継続して営まれている。

②集落では、弥生時代前期から木製品、石器、骨角器、漆製品、玉類の生産が大規模に行われ、作られたものは周辺の集落にも供給されていたと考えられる。

③集落からは土笛、分銅形土製品、鳥形木製品、人面付土器、銅鐸等といった祭祀遺物が出土し、特に土笛や分銅形土製品は同時期の集落に比べて大量に出土している。

④集落内には南海産の貝輪やガラス勾玉といった特殊品を入手することができた有力者（首長）の存在が想定される。

以上のような特徴から西川津遺跡の弥生集落は生産、交流、祭祀において周辺集落の中核的な役割を担っていた「拠点集落」であったと考えられます。

1 弥生集落の出現

西川津遺跡の弥生集落は、今から2500年前頃の弥生時代前期には出現していたと考えられます。山陰の弥生時代前期の主要な遺跡は西川津遺跡同様、日本海沿岸部の低地に多く見られる特徴があります。出雲地方では前期の大規模な集落として矢野遺跡（出雲市）が挙げられ、拠点的な性格が窺える遺跡です。

2 前期の西川津遺跡の玉生産

遺跡では様々なモノ作りが行われていましたが、管玉の生産は山陰でもいち早く行っていました。山陰の管玉生産の最古級の事例としては長瀬高浜遺跡(鳥取県)が存在しますが、技法が少し異なります。両者を比較すると西川津遺跡の技法が大量生産に向いており、中期以降の玉作技術に継承されていくことになります。

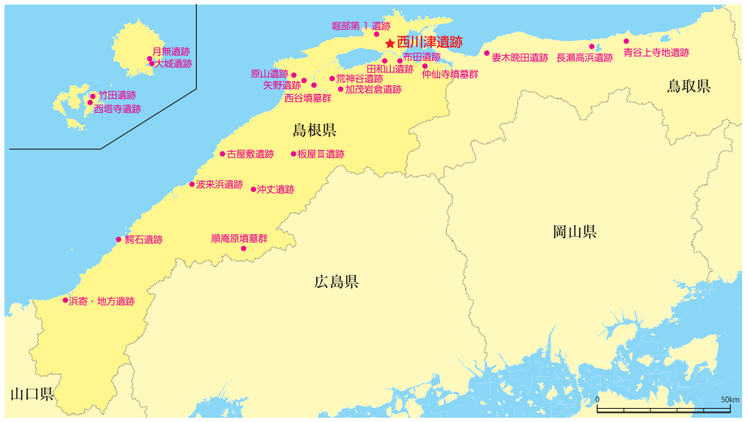
3 前期の西川津遺跡の環濠

遺跡で確認された大溝は環濠の可能性がありますが、周辺の遺跡で弥生前期の環濠がよく分かる遺跡には田和山遺跡があります。これは丘陵上に所在し、環濠内に居住域がない特殊なもので西川津遺跡のような低地に立地するものとは性格が異なっていると考えられます。山陰では弥生時代前期の環濠をもち、その中に住居跡が確認されている確実な遺跡は現段階では確認されていません。

西川津遺跡の弥生集落の想定範囲

4 前期の西川津集落の墓地

県内の弥生時代前期の墓地は、堀部第１遺跡（松江市）、原山遺跡（出雲市）、鰐石遺跡（浜田市）といった日本海沿岸部や、山間部の板屋Ⅲ遺跡（飯南町）、沖丈遺跡（邑南町）で発見されています。この時期の墓地はまとまって存在しているようであり、西川津遺跡の集落の墓地も周辺のどこかにまとまって発見される可能性が考えられます。



西川津遺跡と主な山陰の弥生時代遺跡

遺跡出土の弥生土器・土製品

5 西川津遺跡の水田

前期の大溝の中に残る当時の花粉を調べると、大溝の近辺で水田を行っている可能性は少ないようですので、大溝からやや離れた位置に水田が広がっていものと思われます。また、県内では弥生時代前期の水田は未だ確認されておらず、中期になると布田遺跡（松江市）や浜寄・地方遺跡（益田市）で確認されています。

6 後期の西川津遺跡の集落と墓地

後期の集落は、大溝の存在、木製品等の未製品、ガラス勾玉や他地域の土器の出土から、拠点的な性格をもった集落が継続していた可能性が考えられますが、現状では具体的な内容はよく分かっていません。この時期の墓は、山陰を中心に造られた四隅突出型墳墓が有名で、出雲地方では西谷墳墓群（出雲市）等で確認されています。遺跡周辺では、北東へ2㎞の丘陵に所在する沢下遺跡で確認されており、西川津集落に関わる墓地である可能性も考えられます。

7 西川津遺跡の拠点集落の終焉

発見されている大溝は、後期の終わり頃には確実に埋没しています。その後の古墳時代の様相は出土遺物から断片的に知ることしかできません。弥生時代に拠点集落として存在していた西川津集落は古墳時代という日本列島規模の変化の中で大きく変貌を遂げた可能性が考えられます。

その後の西川津遺跡 ～古墳時代から古代～

古墳時代の集落の場所はまだ確認されていませんが、海崎地区のV区-Bでは石組遺構が発見されており、朝酌川に関わった人々の痕跡が見られます。そのほかに、河川によって堆積した砂礫層等から、土器や木器のほかに周辺で行われた祭祀に関わる卜骨が出土しています。

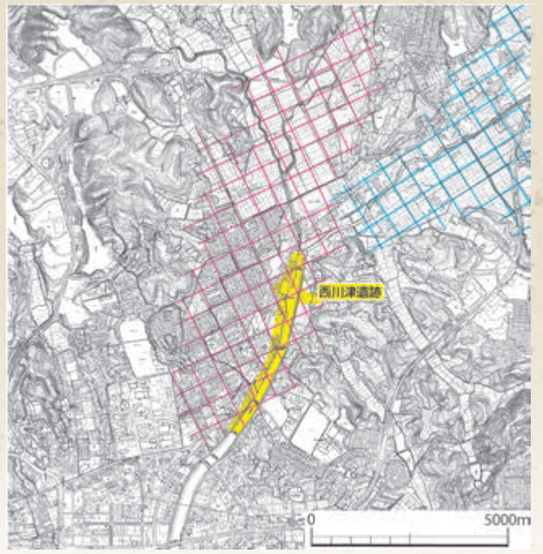
古代の集落の様相も良く分かっていませんが、D区では波板状凹凸面が連続する道路遺構が確認されています。この道路遺構は、北東-南西方向に軸をとるもので、条里（古代の都市計画の地割り）に沿って造られている可能性があります。

古墳時代の石組遺構（海崎地区Ｖ区）
2～3段に人頭大の石を組み、周辺には杭を打ち込んでいます。水辺に下りるための施設、又は一時的な船着き場であった可能性が考えられます。

卜骨（海崎地区Ｂ2区）
シカの左肩胛骨を加工した卜骨です。火で熱した棒状のもので点状に孔をあけています。何らかの卜い行為に用いられたものと考えられ、時期は古墳時代前期の可能性が考えられます。

古墳時代から奈良時代の土器（海崎地区Ｖ区）
古墳時代から奈良時代には土師器・須恵器といった土器が使われていました。

道路遺構（海崎地区：D区）
朝酌川の東側の丘陵裾部には、楕円形状の浅い土坑が連続する道路遺構が発見されています。この道路遺構は北東から南西方向に主軸をとるもので、条里の方向に沿っていることが明らかとなっています。



朝酌川・持田川周辺に今も残る条里
遺跡の周辺は、現在の地図からも分かるように二つの軸に沿った条里の痕跡を確認することができます。

その後の西川津遺跡 ～中世・近世

中世以降の様相は、朝酌川の護岸の跡が確認されているほか、川の東側の丘陵裾部では、掘立柱建物跡からなる集落が発見されています。

掘立柱建物（海崎地区：D区SB01）
丘陵裾には5棟の中世の掘立柱建物が発見されています。この時期には丘陵縁辺部に掘立柱建物による集落が営まれていたと考えられます。

石組遺構（海崎地区D区）
人頭大の石を使用した遺構です。中からは炭化物や焼土が見つかっていることから石組みの中で火が焚かれていたものと考えられます。中世の集落内にあった炊事施設である可能性があります。

柱状卒塔婆（鶴場地区B1区）
卒塔婆は杭に転用されていたものが多く見つかっています。本来は川の辺に立て並べられていたものと推測されます。時期は中世から近世にかけてのものと考えられます。

柱状卒塔婆（宮尾地区・Ⅱ区）
杭に転用されていた十本の卒塔婆のうちの一つで、天明八年（1788）に妙眞という女性の三回忌に関係者が集まり、追善供養を行ったという内容が書かれています。

尊趣者

天明八年九月十三日□□物故妙眞禪尼第三廻忌之［
共養所集功徳奉□伏願偖□利生

西川津遺跡の変遷

少し昔の朝酌川周辺（1993年）

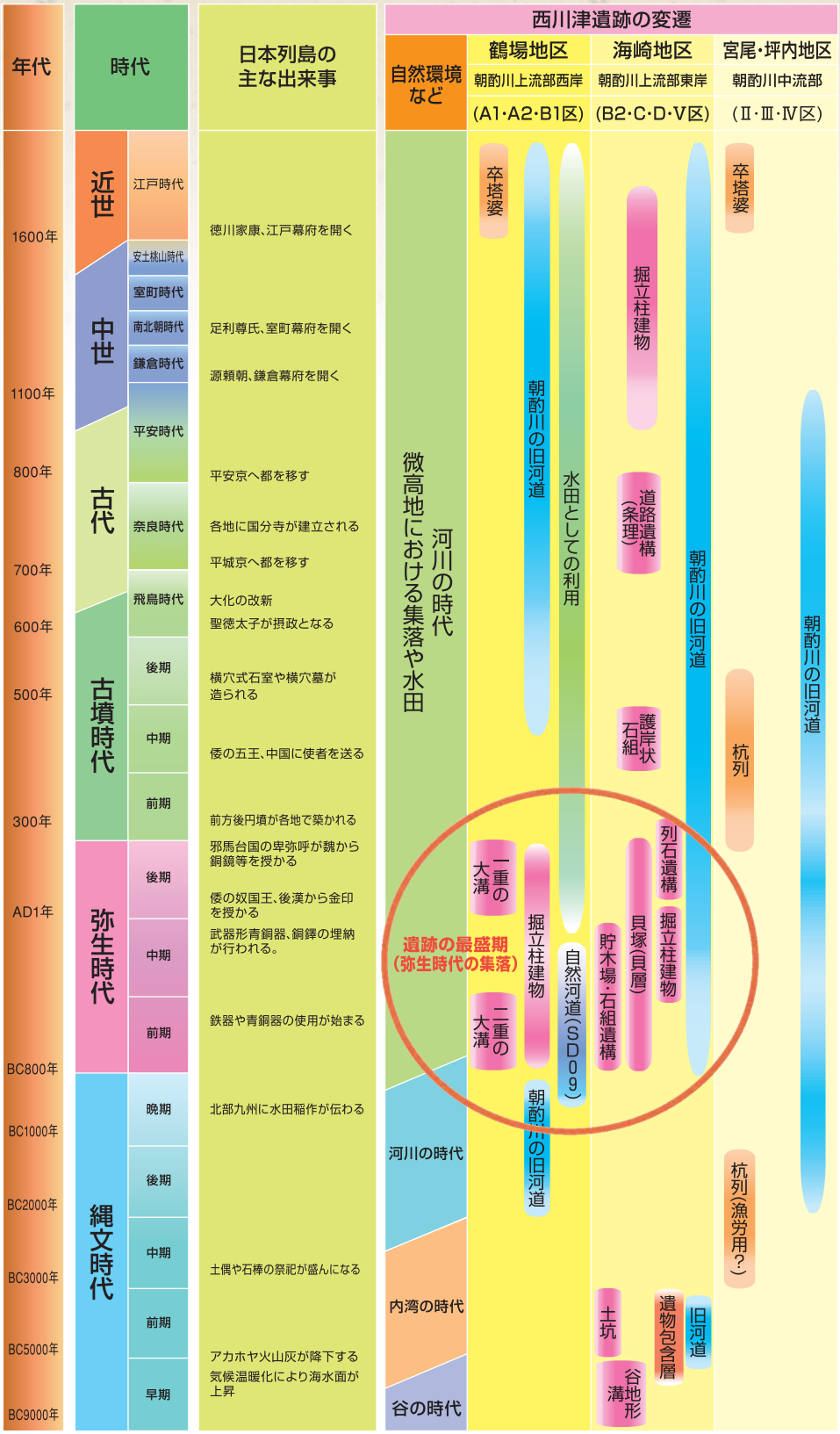
遺跡は朝酌川流域に広がることから、河川の影響を強く受ける場所にあります。遺跡からは主に弥生時代以降の朝酌川の旧河道が発見されています。その頃の景観は今では想像することしかできませんが、蛇行した川の周辺に集落や水田等が広がる景観であったと想像されます。昔の川の雰囲気はつい20年ほど前の河川改修が行われる以前の様子から偲ぶことができます。

中世～近世の卒塔婆

古墳時代～古代の遺物

弥生時代の遺物

縄文時代の遺物



発行：島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（〒690－0131 松江市打出町33番地）